

『うつほ物語』 仲忠の三条京極邸の庭

著者名(日)	倉田 実
雑誌名	大妻国文
巻	46
ページ	9-29
発行年	2015-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006080/

『うつほ物語』 仲忠の三条京極邸の庭

倉 田 実

はじめに

平安貴族邸宅となる寝殿造においては、複数の建物に加えて庭が欠かせない設備として造園されていた。庭は、敷地南方に設けられるので、全体を南庭とも言ったが、狭義には儀式用に使用する砂子を敷きつめた寝殿南側の平面を指す場合もある。この小稿では、南庭をこの狭義の意で使用し、全体的に言う場合は庭としていきたい。

庭を構成する要素として、南庭・遣水・滝・南池・中島・築山を造成し、適宜に籬や垣根に前栽（草花）・植木（樹木）を配し、立石を置いた。滝は遣水の途中に設け、南池の岸は洲浜や荒磯に作り、池中にも立石をした。場合によっては人工的に作泉（つゝいずみ）を設けることもあった。また、建造物として、南池のほとりに釣殿を設け、遣水や中島には反橋を渡していた。付随的な施設としては舟屋も置かれていた。こうした庭が寝殿造に求められたのであった。

したがって、王朝文学作品の舞台や背景、あるいは題材に庭が選ばれることが多かった。前栽や植木は四季折々に変化するので、賞翫するだけでなく、心を寄せたり、託したりする景物として和歌に多く詠まれている。物語や日記でも、庭

にかかわった和歌が多く存在している。そして、中・長編物語では、庭が物語展開に必要な舞台として語られるようになっていく。現存最古の長編物語として知られる『うつほ物語』でもこの点は指摘できる。しかし、『うつほ物語』において、庭が物語展開に必要な不可欠な場として前景化するのには、「楼の上・上」巻になって整備された仲忠の三条京極邸を待たねばならなかったようである。

この小稿では、三条京極邸の庭が、「楼の上」巻で主題的に語られる秘琴伝授と密接にかかわる場として結構されている次第を追尋してみたい。結論から言えば、三条京極邸では、「音楽のための庭」として構想され、実現されていることを見極めてみたいのである。それは、『源氏物語』以前にも庭が物語展開と深く関係して主題的であったことを確認することになる。

なお、『源氏物語』では「胡蝶」巻で語られる六条院の庭は神仙思想で縁取られ、『狭衣物語』になると浄土思想の浸透によって浄土式庭園になっていることなどを指摘している^②ので、併せて参照願えれば幸いである。以下、本文引用は新編日本古典文学全集により、表記を少し私に換えた場合がある。

一 「楼の上」巻以前の庭

三条京極邸で庭が物語展開に必要な不可欠な舞台となったとしたが、これには異論があるかもしれない。すなわち、「吹上」巻で語られる源涼の吹上の宮や藤井の宮、あるいは藤原兼雅の桂邸があると疑義が出されよう。しかし、「吹上」巻の場合は、果たして庭の描写として把握していいかは疑問である。広大過ぎるのであり、庭と言うよりは領地の説明になり、涼一族の「宝の王」としての豊かさを言うために奉仕していると言えよう。

かの君の住みたまふ所は、吹上の浜のほとりなり。宮より東は海なり。その海づらに、岸に沿ひて大いなる松に藤

かかりて、二十町ばかり並み立ちたり。それに次ぎて、樺桜一並並み立ちたり。それに沿ひて、紅梅並み立ちたり。それに沿ひて、躑躅の木ども北に並み立ちて、春の色を尽くして並みたり。秋の紅葉、西面、大いなる河づらに、か
らのごと波を染め、色を尽くし、町を定めて植ゑ渡し、北、南、時を分けつつ、同じやうにしたり。

〔吹上・上〕卷・三八一頁

清原松方が語る吹上の宮の説明である。一町規模が寝殿造になるが、ここは何町になるのであろうか。海に面し、大河も流れている。これを寝殿造の庭と言うわけにはいかないだろう。語られた景観は、庭というよりも財力で再現した領地の説明とした方が理にかなっている。そして、吹上の宮での園遊の様子が語られたとしても、比重があるのは音楽や和歌であり、庭のことは当座的であつた。吹上の宮の豊かさの一環として庭のような語りがあつても、物語全体に及ぶことなく、「吹上」巻内のことに留まつている。

同じことは、「春日詣」「祭の使」「国譲・中」巻などで語られる兼雅の桂邸でも指摘できよう。

夕暮れに、君だち御簾上げて、糸木綿の御几帳ども立て渡して、御前の前に、なだらかなる石、角ある岩など拾ひ立てたる中より、川の湧きたる、滝落ちたるなど見たまふとて、孫王、中納言、兵衛、帥の君など、よき童べなど、岩の上ごとに出だし据ゑ、御琴かき鳴らし、人々に歌詠ませなどして出で居たまへるを、男方の御前、めでたう興ありと思す。

〔祭の使〕卷・四七二頁

桂邸は夏神樂を楽しんだり、涼む避暑の地として使用されており、他の季節での登場はない。また、庭の描写としても、右の「なだらかなる石、角ある岩など拾ひ立てたる中より、川の湧きたる、滝落ちたる」とされるのが最も詳細である。そして、この「川」は遣水のような趣きだが、「湧きたる」とあることからすると、桂川の支流のようでもある。この「川」は、「国譲・中」巻になるとりっぱな川になっていると見なせよう。

御覽ぜしよりは水なども深くなり、魚もいと多く住みはべり。いかなるにかあらむ、山の前より川なむ入りて侍る。

売り買ふ者どもは、家の中よりなむ行き帰りはべる。御覽ぜさせばや。

〔国譲・中〕卷・一九〇頁

兼雅が正頼を桂邸に誘う言葉で、この「川」は、「祭の使」巻にあったものになろう。桂邸は荘園内の別荘の趣きである。桂邸の景観は、庭というよりも別荘の立地を語っているとしたほうが分かりやすい。避暑の地であるから、川が言われ、引用はしないが、訪れた人々は、その流れを歌にしている。

吹上の宮や桂邸の意義は認めるとしても、庭に視点を置けば、それを語ることに眼目があるとは思われない。何よりも庭の描写にはなっていない。領地・荘園の立地的説明の一環になっている趣きであり、当座的で付随的である。仮に庭としたとしても物語展開と絡むことはない。

ただし、庭が物語展開に密接に絡むことはなくとも、庭の描写はそれなりに認められる。念のために他の邸宅の詳しく語られた庭を確認しておこう。

風涼しくなり、虫の声、御前の草木も整ひて、木の葉は色づき、草むらの花咲き、五葉の松はのどけき色をまし、色々の紅葉、薄き濃き、村濃に交じり、月おもしろき夕暮れに、御前の池に月影映りて、よろづおもしろき夕暮れに、八の君、今宮、姫宮、御簾巻き上げて出でおはしまして、例の、御琴ども弾き合はせて遊びたまふを聞きて、

〔嵯峨の院〕卷・三〇八頁

正頼の東北の町である。庭の植栽が詳しく語られ、虫の声や池の月影が捉えられて、まっとうな庭の景色である。しかし、この光景はここだけに留まり、管絃の遊びに移行している。この引用の後に三の宮が庭を眺めて、あて宮への歌を詠むことになるが、歌材は右になかった菊の花になっている。東北の町の秋色の美が語られても、ここだけで収束してしまっている。庭の様子が語られた意義は認めるとしても、物語展開に絡むとまでは言えないのである。

正頼は「祭の使」巻（四六三頁以下）になって釣殿を新造し、そこでの納涼が語られている。釣殿なので庭の描写が行なわれるが、事情は右の「嵯峨の院」巻と同じである。また、藤壺（あて宮）の新たな退出先とされた東南の町の事情も

同じである。

かくて、藤壺のおはする町は、いと面白し。遣水のほどに、八重山吹の高く面白き咲き出たり。池のほとりに、大きな松、藤のかかりてあまたあり。すべて、春の花、秋の紅葉面白く、時々の前栽、草木もいとをかし。遣水に滝落とし、岩立てたるさまなども、異所には似ず。かかること好みたまふ人なれば、しばしなれど、面白うし置きたる。

〔国譲・上〕卷・七八頁

藤壺退出先は東南の町の西の対で、それまでは涼が、さま宮と住んでいた。右で語られた庭の風情は、「かかること好みたまふ人」、すなわち涼が作庭したからであつた。この引用に続いて、涼が整えた建物の豪華さに及んでいき、庭のことはここだけで後に影響することはない。そして、作庭家としての涼像も、再度語られることはない。この後、藤壺は三条京極邸を見ることになるが、その際には「藤壺見たまふに、大殿は、厳めしう上臆しう造りたることこそあれ、見どころ、えかうはあべきならず」〔楼の上・下〕卷・五七七頁〕と見ている。東南の町の庭は風情があるのに、そのことは忘れられている。庭のそれなりの詳細な描写はあつても、やはり物語展開と密接に関係していくことはないのである。庭は主題的になり得ていなかった。しかし、「楼の上・上」卷になって事情は違ってくる。秘琴伝授の場として三条京極邸が構想されると、この主題に即して庭が重要な場として語られていくことになる。以下、三条京極邸の庭に転じていきたい。

二 三条京極邸の構想

三条京極邸は、愛娘犬宮への秘琴伝授の場として構想されていた。その構想に庭はすでに深くかかわっている。

「……」ところにおはして、まづ、仲忠が覚えむ限りをこそは習はしたてまつらめ。春は、霞、ほのかなる鶯の声、花の匂ひを思ひやり、夏の初め、深き夜の時鳥の声、暁の空の気色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜明らかなる月、

思ひ思ひの虫の声、風の音、色々の紅葉の枝を別るる折の気色を思ひ、冬の空、定めなき雲、鳥、獸の気色の、朝の雪の庭を眺め、高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の下の水をあはれば、深き心、高き思ひも、もろもろのことを思ひ合はせ、世の中のすべて、千種にありと見ゆる物の、覚ゆる物、また時に従ひつつ、色衰へ、久しくなり、またむなしくなりぬるものを心に思ひ続けて、琴の音に弾き添へむと、思ひ同じくて弾きはべればこそ、琴の音、思ひ思ひに従ひて響き、よろづの折には合ひはべれ。遊ばすやうに、ただ弾きにやは弾くものならむ」

〔楼の上・上〕卷・四四六頁

仲忠が女一宮に秘琴伝授の仕方を述べるところである。右を仮に二重傍線部「思ひ合はせ」までを前半部とすると、ここでは心を寄せる四季折々の風物のありようを述べている。迂遠なようだが、ここから見ていきたい。四季の移ろいの様子は、整理すると次のようになろう。

天象		聴覚	地象
春	霞	鶯の声	花の匂い
夏	暁の空	時鳥の声	林の中
秋	時雨・月	虫の声・風の音	散る折の紅葉
冬	空・雲	鳥・獸の気色	雪の庭・山頂・池の水の下

四季のありようは、天象と地象、そして、聴覚印象からも言われている。冬の「鳥・獸の気色」は地象でもいいかもしれないが、「鳥」は「鳥の声」とするのが常套であり、「獸」は熊・狼・猿などが代表的で、馴染みとなる猿は鳴声が言われるので、聴覚に入れてみた。天象と地象が言われるのは、秘琴披露の場での奇瑞が、天地感応として表現されることにかかわつていよう。自然の運行は、聴覚印象を加えた天象と地象の三者で捉えられている。この四季折々が、「もろもろのこと」になろう。そして、「深き心、高き思ひ」はこの「もろもろのこと」に「思ひ合はせ」る必要があるとしている。自

然と心を一体化させなければならぬと言わねばなり、「合はす」は後に扱うように伝授に際しての鍵語になっていく。引用後半部はややたどりにくいだが、簡略化すれば、千変万化する「千種」にある物を「心に思ひ続けて」、そこに「琴の音」を「弾き添へ」ることで、その音色は思うように響き、どのような折節にも合うものだとしていよう。「千種」には自然にかかわる「もろもろのこと」に重点を置きつつ、人間的・社会的事象についても言うのもしれない。しかし、それもおのずからそうなる自然と同義としておきたい。

秘琴伝授には、自然と心を一体化し、そこに琴の音色を添えて合わせる必要があると言ふことになる。これが可能となる場が庭であつた。政界に官人として生きていかななくてはならない仲忠には、自然の奥深くに籠つて伝授を行うことは許されない。心静かに秘琴伝授を行える場として、邸宅とその庭が必要になつてゐる。だから、自然のありようは庭において語られることになる。琴の習得に必要な自然のありように思いを馳せるために、庭が必要なのである。庭とは、天象と地象を合一する場であり、秘琴伝授にかかわるので聴覚印象も言われている。仲忠の弁は、秘琴伝授の場への言及であつたが、おのずとそれは庭の構想を語るものであつた。

こうした思いを抱く仲忠が候補地としたのが三条京極邸であつた。そこは、祖父俊蔭と母の故地であつたからであり、祖父の母への伝授の仕方を踏襲するのである。

かくて、おほやけにもかなはず、官、位も辞して、三条の末、京極の大路に、広く面白き家を造りて、娘に琴を習はす。

〔俊蔭〕卷・四四頁

仲忠は俊蔭のように官位を辞すことは許されないが、伝授の場は同じにできる。「三条の末」は、京極大路を越えた京外になり、後に示される楼も建てることができる。また、賀茂川も近い。母の賛同を得た仲忠は実地検分に訪れている。

京極におはしまして、静かに、巡る巡る見歩きたまふに、世の中にありとある木、花、紅葉、数を尽くしてあり。唐土にもありけるものの、実をかしく、花、紅葉めづらかにする木、草どもの、種をさへ植ゑ置きたまへりけるも、

山中所々にいと面白く、何とも人知らぬ生ひたり。一年は、いたくおほよそにこそ面白しと見たまひしか。のどかに見たまふに、かかる所なし。年経たる岩の、色々の苔生ひやうも、いとをかしうめづらかなるを、立て置かれたりける、さらに取り動かし直すべきにもあらざりけり、と見たまふ。治部卿はうつほの巻に見えたり。その祖父大弁滋野の王は、皇女の婿なりしかば、この家もと名高き宮とて、今の世の面白き所にはいひ、すぐれたるなり。

〔楼の上・上〕卷・四五五頁

今の三条京極邸は荒廢していても、俊蔭が作庭した当時の面影を残していた。建物はほぼ廢墟になっていたので、実地検分で確認されたのは庭の様子であった。この世に存在するあらゆる花や紅葉や実のなる木が植栽されていて、中には俊蔭が唐土から持って来た種から生えたものも山中にあった。いろいろな苔の生えた風情ある岩も置かれていて、それらはそのまま再利用が可能で、新たに組み直す必要もなかったという。右では前栽・植木・築山・立石などが検分されているだけだが、当然南池もあったことであろう。それらには俊蔭の心が込められていたことになる。俊蔭の思いを引き継ぐこと、これは「蔵開・上」巻以来の課題でもあった。だから、これらは修造される三条京極邸の庭にそのまま活かされることになる。秘琴伝授の場として三条京極邸が浮上した時、おのずと俊蔭と共に庭も前景化されたのである。

この地は、俊蔭の祖父（曾祖父ではないかとする説もある）が皇女の婿だったので、かつては「名高き宮」で「今の世の面白き所」とされている。あらたな来歴が示されることで、三条京極邸の正統性が明確にされるのであり、それは秘琴伝授の系譜を鮮明にすることでもあった。

三 三条京極邸のプラン

三条京極邸の新たな概要は、仲忠によって次のように示されている。

北の対、西、東の対、ことにうるはしくよかりけり。四面に垣巡り、白き壁塗らすべかんめり。この西の対の南の端に、未申の方かけて、むかし墓ありける跡のまゝに、念誦堂建てたり。南の山の花の木どもの中に、二つの楼、丈よきほどに、こちたからぬほどに、たちまちに造るべし。西、東に並べて、楼の二つの中に、いと高き反橋をして、北、南には、格子かくべし。それにわれは居たまはむとす。(略)東の対の南の端には、広き池流れ入りたり。その上に釣殿建てられたり。その水のさま洲浜のやうにて、御前の南には中島あり。それに、楼は建つべきなり。「御前の木陰の高きを、そよりは南なる岸繁ければ、透きてはつかに見ゆべし。西、東のそばよりは見えたらむは、柳の木どもの中より、小高く面白からむこと限りなからむ」など、人々興じ申す。

楼の高欄など、あらはなる内造りなどは、かの開けたまひし御蔵に置かれたりける蘇枋、紫檀をもちて造らせたまふ。黒鉄には、白銀、黄金に塗り返しをす。連子すべき所には、白く、青く、黄なる木の沈をもちて、色々に造らせたまふを、さるべき所々には、白銀、黄金、筋やりたり。まづ門鎖して、大将おはしたまひて、御覧じて造らせたまふ。

〔楼の上・上〕巻・四五六〜七頁

仲忠が修理大夫に語ったプランである。設計・施工は仲忠自身の監督・差配となる。建物は後文で「もとの礎のまゝ」(同・五〇〇頁)であつたとされている。実地検分した際に見た花・紅葉と苔生す岩はそのまま活かされるであろうから、仲忠はあくまでも俊蔭の意向・意匠を推し量つて、建物と庭を再建・修造することになろう。三条京極邸の正統性のために、俊蔭の作意は継承されなければならない。

建物については、本稿で詳しく言及する余裕はないが、簡単に触れておきたい。この引用部で寝殿についての言及がなく、対の屋のことばかりなのは、「さるべき屋どもは、一年造らせて侍り。対などなむ、造らすべきやう侍る」(同・四四七頁)とされていたからであろう。寝殿は建造済みで、対の屋を作る必要があつたわけだが、「ことにうるはしくよかりけり」とある語りから、この時点で完成していたと思われる。「蔵開・上」巻には、次のようにあつた。

国々の受領などのさしつべきを、対一つづ預け、しつべき人々に、みなのだまひ預けつつ造らせたまふ。まづ、築地、二、三百人の夫どもして、その年の内に築きつ。
〔蔵開・上〕卷・三三〇頁

三つの対の屋は、受領たちに命じて建造させるようにしていて、まず築地で敷地を開うようにしていた。だから、対の屋の完成が「ことにうるはしくよかりけり」と確認されたのであろう。また、「四面に垣巡り、白き壁塗らすべかんめり」とあるのは、築地が完成済みだするとやや整合しないが、この「四面に垣」はやはり築地で、それを高級な白壁に塗り直すことになろうか。

念誦堂に関しては、「俊蔭」「蔵開・上」両巻に言及はなく、先の引用部では墓のあった所に新たに建てたようになっていた。しかし、三条京極邸移徙後に仲忠が父兼雅に「念誦堂の柱のみ所々立て渡し」〔楼の上・上〕卷・五〇一頁〕であつたと語っているので、俊蔭以来の、墓のあった所の建物となろうか。念誦堂の位置は「西の対の南の端」とされるので、西中門廊の南端となろう。これと対になるのが「東の対の南の端」の東釣殿になり、東中門廊に続いていることになる。念誦堂が俊蔭以来とすれば、東釣殿も当時あつたと思われる。

二つの楼以外の建物としては、完成後からすると、楼に上がるための呉橋（呉階）、その前に橋殿、楼から念誦堂と東釣殿とにそれぞれ繋ぐ二つの反橋が作られており、これらは新たな造作になる。この他には、渡殿・舟屋・泉殿などが建造されている。渡殿はかつてあつたとして間違いなく、舟屋も嵯峨院が往時よりも高く作られていると発言しているので〔楼の上・下〕卷・五七八頁）、これも同じである。泉殿はここだけの用例になり、由縁は不明である。

こうして見ると、庭を含めた寝殿造の様式をそっくり供えて、さらに二つの楼で三条京極邸は荘厳化されることになる。二つの楼は、南池の中島に設計されているので、庭の中央近くに位置することになる。おのずと楼を取り巻く庭の比重が高まろう。

楼に関しては多様な説があるが、ここではその紹介を先行研究に譲ることにして、私見だけ述べておきたい。楼は高殿

の意なので、まず高さだが、当時の人々に意識された高いものは、「高き物面白くは、朱雀門・幡幢などを、いかに絶えず見る人侍らまし」（「楼の上・上」巻・四七三頁）とあるので、目安は棟高20メートルほどの朱雀門くらいになる。しかし、俊蔭女が「呉橋」を昇降するのだから、それよりは低く考えるべきであろう。完成後の食事に関して、仲忠は「（楼の上から）少し下りたる高欄に出でて参る」（「楼の上・下」巻・五一四頁）とあるので中層階があるとの想定であろう。そうすると三層階の高さになると思われる。形状としては、当時の京内で楼と言えば大極殿の翼廊となる蒼龍楼と白虎楼の一对が想起されよう。三条京極邸の楼には、香の匂いが立ち込めるものの仏教的な印象が希薄なので、浄土変相図などに描かれており、回廊の屋根の上に二層で建てられていて、一層目の四隅には小さな楼が張り出されている。仲忠の楼は、この蒼龍楼の四隅の小楼を除いた形状と考えておきたい。

庭のことに戻ろう。建物が建造されるに依じて、庭も整備されるのであろう。「東の対の南の端には、広き池流れ入りたり。その上に釣殿建てられたり。その水のさま洲浜のやうにて、御前の南には中島あり」とあるのは、庭整備の一環になるが、池と中島の形状はもともとなのか、修造したのか、分からない。しかし、釣殿が昔もあつたとすれば、「広き池流れ入りたり」は、もともとこうあつたということになろう。しかし、岸辺は洲浜として整えたのであろう。洲浜は荒廃すると土に埋もれるのが常であつた。また、中島は二つの楼のために、大きく造成されたと思われる。大規模な庭整備があつたことになる。それは、庭が三条京極邸に必須な要件であつたからに他ならない。

右の引用部では、庭の景観に関しても示唆されている。「南の山の花の木ども」と、匠や庭師であろう人々が噂した「御前の木陰の高きを、そよりは南なる岸繁ければ、透きてはつかに見ゆべし。西、東のそばよりは見えたらむは、柳の木どもの中より、小高く面白からむこと限りなからむ」などの部分である。このうち「御前の木陰」は底本「こせんのこけ」の校訂になるが、「御前の池」「御殿の丈」などとする説もある。ここは、新全集の解に従っておきたい。また「小高く」は

「木高く」とあつたのを私に改めた。そうするとこれらの説明は樹木にかかわって、寢殿から南方の楼を見た景観と、東西からのそれになると思われる。寢殿からだと手前に高い木々があり、南池の北岸（そよりは南なる岸）にも木々が茂っている、その奥の楼は木々の間から透けて見えるということになる。また、「西、東のそばより……」の箇所は、「西と東の池の側から見えるのは、柳の木々の中を通しての楼で、その木々よりも少し高く見えて面白いこと限りないだろう」となると思われる。楼が木々に取り巻かれて高く見えるというのであり、それは庭の中心的な景観であつた。三条京極邸は秘琴伝授の場となる二つの楼が中心となることで、それを取り巻く庭が必然化されるのである。庭の重要性が、構想の段階で明らかである。

四 三条京極邸移徙

三条京極邸は完成し、八月十三日から三日間を要する盛大華麗な移徙の儀式がなされている。それは、完成前から話題になつた楼の威容を見たい人々が饗宴に加わるからでもあつた。儀式次第の詳細は省略して、参集した人々が楼を見に行く段を見たい。

宮も見やりたまふに、聞きたまひしよりも、あなめでたと見ゆるに、近うて見たまふ人々の御目には、照り輝きて、この世にかかることあらじと、またなければ、目もあやに見えたり。南の庭の、遙かなる水の洲浜のあなた、山際に立てる二つの楼の中三間ばかりを、いと高き反橋の高きにして、北、南には、沈の格子かきたり。白き所には、白物には夜具貝をつき混せて塗りたれば、きらきらす。楼の上に、檜皮をば葺かで、青盜の濃き薄き、黄ばみたるを、瓦の形に焼かせて、葺かせたまへり。楼の西より、西の対の南の端なる念誦堂に継ぐほどは、十五間なり。池の尻、遣水の上なるに反橋を、左、右には、高欄にして瓦葺きしたり。東の釣殿に継ぐまでのほどは、同じ十五間なり。楼

のそばにも、かかる反橋をしたり。丈は、ただ人の歩くばかりにて、長々と造られたり。水は長々と、下より流れ舞ひて、楼を巡りたり。立石どもはさまざまにて、反橋のこなたかなたにあり。

巡る巡る人々見たまひて、「いはむ方なく面白きこと」と愛でたまふこと限りなし。「見さして帰るべきことなくなむ。これを、朱雀院、嵯峨の院に御覧ぜさせばや。いかにいみじう興ぜさせたまはむ。かうぎまの所には、春は花、秋は紅葉盛りなどには、かの惜しませたまふ手は、えとどめがたくこそあんべけれ」などのたまうて、夜に入るまで立ちくらしたまふ。

〔楼の上・上〕巻・四九二―三頁

引用冒頭「宮」は女一宮で、寝殿から眺めるだけだが、庭に下りて「近うて見たまふ人々」もいた。男性たちである。寝殿造の庭は、舟遊びのほかは、基本的に寝殿や対の屋、あるいは釣殿などから見るものであった。池泉回遊はまだ先の時代になる。しかし、三条京極邸に参集した人々は、「巡る巡る人々見たまひて」ともあるように庭を歩き回り、「夜に入るまで立ちくらし」している。この世にこんな美しいものはないと見るからである。主に楼の威容を指すのであろうが、庭全体の景観に対する讃嘆と言えよう。庭の様子はプランの段階よりもさらに明確になっているので、実際の景観を見ていきたい。

「南の庭の、遙かなる水の洲浜のあなた、山際に立てる二つの楼……」とあるのは、建物から降りた人々の庭に向けられた視線となろう。南の庭の、長々と続く池の洲浜の向こう、中島の築山のそばに立っている二つ楼というように捉えられている。そして、楼がこまかく観察されているが、ここは割愛したい。なお、登楼はまだされていないと思われる。それは伝授披露の時になされている（後述）。

視線はさらに楼から外れて、その東西にも及んでいる。西側は、「念誦堂に継ぐほどは、十五間なり。池の尻、遣水の上なるに反橋を、左、右には、高欄にして瓦葺きしたり」とされるが、分かりにくい。ここは「楼から念誦堂に繋ぐ距離は十五間である。池の端や遣水の上には、反橋を架け、左右は高欄にして屋根を瓦葺きにしている」ということであろうが、

「池の尻」が分かりにくく、また、中島から池をどう越えているのかも不明である。この長い反橋は、住吉大社の太鼓橋のような半円形ではなく、弓のように十五間分がゆるやかに反つて架けられているのであろう。それに高欄と瓦屋根が付けられている。イメージとしては、現代のもので瓦葺きではないが、愛媛県内子町石畳地区の弓削神社にある屋根付き橋（太鼓橋とも）のような形状なのであろう。反橋を渡ることの中島の楼は伝授にふさわしい聖別化された空間になっている。

楼の東側も東釣殿まで同じく十五間あり、「楼のそばにも、かかる反橋をしたり」とされている。ここは、「楼のそば」とあるだけなので、遣水をまたいでいいことになるのか。そうすると、東西の反橋の架け方が違ってきて、二つの楼を中心とした景観は左右対称ではなくなる。そもそも念誦堂に対するのが東釣殿になるので、対称性を強調しないほうがいいであらう。なお、寝殿造の遣水は、南庭東側を流すが、ここでは西側になっている。これ以降に遣水が五例出てくるが、東西の別は分らない。

人々の視線は、さらに水と立石に転じている。「水は長々と、下より流れ舞ひて、楼を巡りたり。立石どもはさまざまにて、反橋のこなたかなたにあり」とされている。ここも「水は長々と、下より流れ舞ひて」がよく分らない。「二つの反橋の下を通つて舞うように流れて」とする解が目立つが、「長々と」の解釈に問題を残している。ここは、「水は遣水を長々と流れて、西側の反橋の下を流れ舞うようにして南池に入り、楼のある中島を巡っている」となるのか。いずれにしても、流れる水と、盤石な立石の多様な風情とが注目されているのであり、水と石は日本庭園を構成する二大要素であつた。

こうして庭の景観が把握されると、人々は「かうざまの所には、春は花、秋は紅葉盛りなどには、かの惜しませたまふ手は、えとどめがたくこそあんべけれ」と噂することになる。花や紅葉の盛りには、惜しんでなかなか琴を弾こうとしないう俊蔭女や仲忠も、そうはいかずに、弾きやめることはできないであらうとしている。美しい自然の推移に心は動じて、弾奏に及ぶという発想であり、これはまた仲忠が秘琴伝授で目指したことでもあつた。この点はさらに節を変えて見えてきたい。

なお、庭の景観として築山のことを補足しておく。中島に築山があったことは先の用例で判明するが、この他にも築かれていた。池の南方の「南の山」(五一四頁)や「未申の山」(五二五頁)があり、さらに「四方の山林」(五九五頁)ともあるので、四方に築山されていたことになる。そして、これらの山から吹く、「山おろしの風」(五二五頁)、「山高き木どもの風」(五四七頁)も語られている。また、「楼の南なる山井」(五四九頁)があり、その水で俊蔭女と犬宮が洗髪している。さらに、「山の高さより落つる滝」(五二五・六一六頁)とあるが、三条末の京極ではポンプでもない限り築山の滝はあり得ない。北山でも幻想したのであろう。

以上、人々の視線で捉えられた庭の具体的な景観を確認した。かなり詳細に庭が見られていたことが知られよう。こうした語りが要請されるほど、三条京極邸の庭は物語展開にとって重要なのであった。それは、繰り返すことになるが、秘琴伝授にふさわしい場として庭があったからに他ならない。続いてこの点について見ていきたい。

五 「合はす」「合ふ」秘琴伝授

移徙の儀も終わり、「楼の上・下」巻になると、楼に籠って仲忠と俊蔭女は犬宮に秘琴伝授を行っていく。伝授は、季節の移ろいやその折に心を寄せながら、「合はす」ことでなされている。この節では、一年間に及ぶ伝授に際して、繰り返し語られる庭との交感とでもいうような「合はす」ありようを追うことにしたい。まさにこの点において、庭の重要性が確認されよう。庭は、最初に記したように、天象と地象が合一された場であった。

- ① 夜いたう更けたる月夜の、遥かに澄みたるに、二ところ弾き合はせたまひて、犬宮に同じ手を弾かせたてまつりたまふ。ただ同じ調べを弾かせたてまつらせたまふ。ただ同じことなるを、うれしう、大将覺えたまふ。

〔楼の上・下〕巻・五一五―六一六頁

八月の下旬、「夜いたう更けたる月夜の、遙かに澄みたる」という天象のもと、伝授が行われている。そのやり方は、俊蔭女と仲忠とが「弾き合はせ」、それを聞かせて犬宮に「同じ手」「同じ調べ」を弾かせている。ここでは、師となる二人が「合はす」のである。そして、これ以後、様々な「合はす」仕方が語られていくことになる。

② 月のいと明らかに、空澄みわたりて静かなるに、山の木陰、水の波、やうやう風涼しくうち吹き立てたるに、いとおとなおとなしう弾き合はせたまへるを、大将、尚侍のおとども、折も心細くなりゆくに、涙落ちて、ことの心教へたてまつりたまふ。
(同・五二三頁)

この直前に「菊の宴」の為に仲忠が参内することが語られており、九月になっている。「月のいと明らかに、空澄みわたりて静か」な天象のもと、「山の木陰、水の波」の地象が見られて、「やうやう風涼しくうち吹き立て」る音が聴かれている。ここでは犬宮が、こうした時節に「弾き合はせ」ている。晩秋の庭の風情に合わせているのである。それと同時に「この心」が教えられている。折に合った曲の意味を教授するのであろう。

③ いとかしこく、いささか苦しと思したらで、よろづの折々に著う、曲の物弾きたまふさま、いと愛し。前栽も山の木どもも紅葉ぢ、黄櫨の紅葉、今色づく。さまざまに面白く、風やうやう荒々し。山の中より落つる滝も、静かなる所にて聞きたまへば、よろづものの音に合ひてあはれなり。
(同・五二五頁)

同じくまだ九月である。犬宮は「よろづの折々」に合わせて弾いている。前栽や築山の木々も色づき、風の音は冬の到来を前にして荒々しくなっている。築山から落ちる滝の音も、静かな楼で聴くと、様々なものの音に「合ひ」て、しみじみとした趣きがある。庭の音が琴の音に「合ふ」のである。弾くのは三人それぞれであらう。

④ 犬宮も、楓の琴の上に散り覆ひたるを、

まろが弾くうらやましとや琴の上に楓も

とばかり、「恥づかしと思ふ」とのたまひて、末ものたまはぬを、尚侍の殿、「いかにか。なほのたまはせよ、のたま

はせよ」とて、「かかる音を弾かむ」とのたまはす。この浜つ風の荒き音に、いとかしこく合はせて弾きたまへるを、大將愛しう聞きおはす。

(同・五二六頁)

③と同一の日で、引用部直前に昔日のことを想起した俊蔭女と仲忠との贈答歌が詠まれており、それに犬宮が加わるのである。犬宮が恥じて歌の末まで口にしないので、俊蔭女が言わせようとしているのは、和歌の教えになる。犬宮の付けた「かかる音を弾かむ」では字足らずになるので補正する説もあるが、この形で幼さも表現するのであろう。しかし、犬宮の歌は、伝授の真髓を踏まえていよう。「自分が弾く琴を羨ましいと思って、楓も琴の上に散り、こんな音色で弾くのでしう」としている。自分と同じ音色を楓も弾くだろうということは、自分と自然とが弹奏において「合ふ」ことになる。犬宮も庭と交感して練習に励むものであり、賀茂の荒々しい川風の音にも「いとかしこく合はせて」いる。

⑤ 風限りなく激しく、日荒れ、空の気色苦しげなり。尚侍のおとど、かかる折にあひしらひ、弾かせたてまつりたまふに、いささか誤らず、今少し、もとの御琴の音よりはすぐれたりと聞こゆ。

(同・五三〇頁)

十一月になっており、天象は冬の荒々しさである。「合はす」はないが、「あひしらひ」は関係する語である。俊蔭女は、このような折にもかなうように犬宮に演奏させている。技量は確実に上達しており、俊蔭女の音より優れていると仲忠は聞いている。

⑥ 山の気色、色づく見るもいとをかしとて、三月、節供、例のいと清らにて参りたまふ。桜の花・樺桜の花、いと面白し。楼はただ桜の花の中に包まれたり。犬宮一ところ、まめやかにおはすればにやあらむ、いとこよなくおとなおとなしうなりまさりたまふ。鶯の声いと近う、花に居て鳴くを、琴をいとのどやかに、その声に合はせて弾きたまひつつ、

(同・五四四〜五四五頁)

年が変わり晩春の桜花の季節になっている。楼は、桜の中に包まれている。さぞかしの光景とならう。犬宮はたいそう大人びてきており、鶯が桜花の枝に居て鳴くので、その声に「合はせ」てのどやかに弹奏している。

⑦ 今は長雨がちなり。静やかに降りて暮らす日、時鳥かすかに鳴き渡り、月ほのかに見えたり。三ところながら、静かに弾き合はせたまへる、いと面白し。
(同・五四六頁)

五月雨の時候である。ここでは、三人が「弾き合はせ」している。犬宮の技量は、師と同じ水準に達しているのである。そして、三人の「弾き合はせ」は、奇瑞を起こすまでになっていく。七月七日の夜である。

⑧ 夜いたう更けぬれば、七日の月、今は入るべきに、光たちまちに明らかになりて、かの楼の上と思しきにあたりて輝く。神遙かに鳴り行きて、月の巡りに星集まるめり。世になう香ばしき風、吹き匂はしたり。少し寝入りたる人々、目覚めて、異ごとおぼえず、空に向かひて見聞く。楼の巡りは、ましてさまさまに、めづらしう香ばしき香満ちたり。三ところながら、大将おはする渡殿にて弾きたまふなり。下を見おろしたまへば、月の光に、前栽の露、玉を敷きたるやうなり。響き澄み、音高きことすぐれたる琴なれば、尚侍のおとど、忍びて、音の限りもえかき鳴らしたまはず。色々の雲、月の巡りに立ち舞ひて、琴の声高く鳴る時は、月、星、雲も騒がしくて、静かに鳴る折は、のどかなり。聞きたまふに、飽くべき世なう、曉までも聞かむと思すに、夜中多く過ぐるほどに弾きやみたまひぬ。(同・五五〇頁)

来合せた涼が聞いているところである。月光・雷鳴・星雲などの天象は異常をきたし、香ばしい匂いが風に運ばれて楼の回りに漂っている。地象では前栽の露が月光を受けて玉のようにきらめき光っている。この奇瑞を呼び起こしたのは、琴の弾奏であった。

琴の弾奏は、三人の合奏であった。「三ところながら、大将おはする渡殿にて弾きたまふなり」とあるのは重要であろう。ただ「渡殿」は「反橋」とありたいところである。とにかく、二つの楼をつなぐ渡殿で三人が弾奏して奇瑞を起こしたということは、秘琴伝授の完成を意味している。仲忠が、俊蔭女と犬宮を繋げたことにもなる。⁽⁵⁾ 俊蔭女―仲忠―犬宮と続く琴の相伝がなり、あらたな系譜になったのである。

庭の中央に建てた楼で行われた秘琴伝授。四季折々の庭の風情に心を寄せ、音楽をそれに「合はす」ことで琴の修練は

実を結んだのである。残されるのは、楼から降りて、伝授披露をするだけである。

六 秘琴伝授披露

伝授の成果は八月十五日に披露されることになり、人々は前日から参集している。夜が明けてから、人々は改めて秘琴伝授の結果が披露される三条京極邸の庭を眺めて讃嘆している。以下は披露に際しての庭の様子だけに絞って見ることになる。なお、次の引用にある「北の方を見やりたまへば」とあるのは、寝殿北側のことでなく、「南の方」に対するもので、寝殿南面近くの光景のことである。

明けゆくままに、御方々、南の方、池、中島、釣殿、未申の堂の方、左右の反橋、楼のさまなど見たまふに、限りなく面白くめでたしと見たまふ。北の方を見やりたまへば、遣水、枝ざしをかしう、めづらかなる木ども、小松ども、遣水のこなたかなたに多かり。対などは、こなたには見えず。遙々と庭の様に、白く面白きに、苔生ひ、紅葉の木ども見ゆ。

(同・五七六―七七頁)

ここの語られ方は、第三節で引用した移徙の際とは相違していよう。移徙の際は、楼の威容と珍しさに比重がおかれて庭が眺められていた。しかし、ここでの楼は、庭を構成する一つになっている。それは庭全体の素晴らしさを改めて語りたいからである。人々の視線は「南の方」から「北の方」に移り、はるばるとした庭の面白さに興じている。庭全体の景観を讃嘆しているのである。

右で楼に重きを置かれないのは、この後に登楼するからになる。楼の中の様子に感動する人々の様子や、そこからの眺望も語られている。

院の上二ところ、左右大臣、宮たち、上達部、御供にて、楼御覧じに上らせたまふ。嵯峨の院は、西の対よりおは

します。上の親王、上達部、左右分けて、御後に歩み続きたり。楼の香ばしき匂ひ、限りなし。御方々を御覧じまはすに、をかしくなまめかし。見どころある楼の中の有様御覧じて、「いみじくをかしくめでたくもしたるかな」と仰せらる。まして嵯峨の院は、らうらうじくはなやかに愛でさせたまひて、「琴の音を聞くと、ここの有様を見るとこそ、天女の花園もかくやあらむと覺ゆれ」とのたまふ。朱雀院、細かに御覧するに、飽かずめでたければ、「げに、ここにかたちよろしからざらむ人の、居るべき所のさまにはあらざりけり」とのたまはす。

やむごとなき限り、隙もなく、楼の巡りの高欄に候ひたまふ。山の高きより落つる滝の、唐傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ちかかりて湧き返る下に、をかしげなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに従ひて動く。

(同・六一五―六一六頁)

外部の人々が初めて見る、楼の内部とそこからの庭の景観である。人々は内部に感動し、外部景観に見とれている。三条京極邸の庭は、寝殿から見られた光景とともに、楼からの景観も改めて語っている。庭が秘琴伝授の物語にいかにも必須であつたかを語っている。

右の登楼の際の語られ方の意味は、嵯峨院の発言にあつた、「琴の音を聞くと、ここの有様を見るとこそ、天女の花園もかくやあらむと覺ゆれ」に象徴されている。「ここの有様」は、文脈的には楼の内部を指すが、寝殿で琴の音を聞いた感動と合わせられているので、庭全体のこととも敷衍できよう。秘琴の音を聞き、楼を含めた庭の有様を見ると、ここは「天女の花園」と思われると言っていることになる。「天女の花園」は、俊蔭の秘琴習得にかかわって頻出した言葉であつた。俊蔭の生存時を知る嵯峨院ならではの発言であり、感動である。物語は秘琴伝授披露で幕を下ろすが、嵯峨院のこんな言葉によつても、「俊蔭」巻が引き寄せられているのである。そして、三条京極邸は、楼のある庭によつて「天女の花園」になつたことになる。

おわりに

三条京極邸において、庭が前景化されて語られたのは、「天女の花園」に比定するためであった。だから庭は「音楽のための庭」として構想され、実現されたのである。ここにおいて『うつほ物語』は、庭が、物語展開と密接に深く関係して主題的になったのである。

なお、庭の樹木などについては言及できなかったが、これらの点については先行研究⁽⁶⁾などを参照されたい。また、三条京極邸に関しては、秘琴伝授の過程で俊蔭女が度々「俊蔭」巻の時代を懐旧する様子が語られている。さらに、嵯峨院や七十歳の宮内卿などは木高くなった桜や松の様子を歌に詠んで、俊蔭生存時を回想している(六一七頁)。これらの点は庭だけにとどまらず「楼の上」巻の主題性や、物語全体の結構とかかわっているようである。こうした問題を課題として、ひとまず三条京極邸において庭が主題的になった次第を確認して終わりにしたい。

注

- (1) 拙稿「文学から見た平安時代庭園―『源氏物語』「胡蝶」巻から―」(『古代庭園研究Ⅱ』奈良文化財研究所、二〇一一・三)
- (2) 拙稿「『狭衣物語』の浄土寺院と浄土庭園―道長の法成寺と頼通の平等院の影―」(『国語と国文学』二〇一一・三)
- (3) 伊藤禎子「秘曲の醸成」(『うつほ物語』と転倒される快楽』森話社、二〇一一・五)など。
- (4) 坂本信道「『楼の上』巻名試論―『宇津保物語』の音楽―」(『国語国文』一九九一・六)
- (5) 野口元大「霊異と栄誉―『楼の上』の主題―」(『王朝仮名文学論攷』風間書房、二〇〇二・八)
- (6) 岩原真代「『うつほ物語』『楼の上』巻・京極邸の庭園造詣―子の日の松といぬ宮造型から―」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』46、二〇一〇・一一)など。